

12
月



平成 29 年 11 月 27 日

佛教大学附属幼稚園

そっとの風

園長 藤堂俊英

掃いても掃いても散る落ち葉、掃除もやっと一段落。ほっとした思いでふと頭上のこず枝を見上げると、寒風に吹かれながらほんの数枚の枯れ葉が名残惜しそうに残っているのを見かけます。次に紹介するのは、はたちよしこさんの「落葉」という詩です。

樹は つかわなくなったものを
なぜ こんなに 美しくしてから 手ばなすのだろう
燃えるように かがやかせて



樹が葉を紅葉させ落葉させるわけは、知恵の眼を以てすれば、植物生理学の知識を駆使してきっちり説明できます。でも慈しみの眼を以てすれば、この詩のように赤や黄に美しく染まった葉に、我が子を愛おしむ親心を見ることができます。そうした慈しみという眼は、ヒトという生き物のみが進化させてきた想像力によって培われて行きます。現代は科学技術全盛の時代ですが、ヒトという生き物が健やかに成長するためには知恵の眼だけではなく、慈しみという眼も不可欠です。私たちはそれが両輪となって前進するところに、ヒトの子の健やかな成長があるという共通認識を持ちたいものです。

その慈しみの眼を育てる想像力や共感力を豊かにするトレーニングとして、絵本を見ることや、この園だよりでもよく紹介するような詩を読み聞かせることがあります。幼稚園の正面玄関横のガラス戸のついた掲示板に毎月、詩とそれにまつわる壁面画を添えて親子で読んでもらえるようにしているのも、その一環です。

最近、幼稚園の年長組に通う孫と一緒に読んだ瀧村有子さんの『そっと』という絵本を紹介します。3歳のりっちゃんという女の子はママみたいになりたくて、ママのまねっこをします。台所からテーブルにミルクの入ったコップを運ぶのですが、こぼしてしまいます。

そこでママはりっちゃんに「そっと」ということを教えます。いつもの公園に行くと、お友だちのひろちゃんがママに連れられ、妹の赤ちゃんと一緒に来ていました。りっちゃんは ベビーカーで眠っている赤ちゃんにさわりたいくて、「おこさないようね」と言われ、ドキドキしながらそっと赤ちゃんの手にさわります。スヤスヤねむっている赤ちゃんを見て、りっちゃんはにっこりします。ひろちゃんが「しゃぼんだまやろー！」って誘ってくれたのですが、やったことがないのでうまくできません。そこでママはりっちゃんのほっぺに、そっと息を吹き、「ママの風さん、そっと届きましたかー？」とたずねます。そっとの風を知ったりりっちゃんはしゃぼんだまを上手に飛ばして大喜びします。それ以来りっちゃんはミルクのコップも上手に運べるようになります。

寒風が身に凍みる季節ですが、このような「そっとの風」を大切にしながら、皆でぬくもりのシャボン玉をふわりと飛ばしてみたいものです。